
コッター品店よろず屋

HOLY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コットー品店よろず屋

【Nコード】

N8082B

【作者名】

HOLY

【あらすじ】

『ただひたすら叫び続けるがま口』や、『客を拒絶する招き猫』など、妙な商品ばかりあつまってくる骨董品店、よろず屋で働く詩郎とみゆきの奮闘ぶりをお楽しみください！1話完結なので、何話から読んでも大丈夫！

その0 まあ、前置き

青い空、かがやく太陽、歌う小鳥にボロい店！

ああー！なんてすがすがしい朝なんだろう！？あはははは！くるくるくるー！。

「シロー、店先でなに踊ってるのー？」

「・・・なんでもない。なんか悲しい気持ちを吹き飛ばそうと努力していたのだ。」

「ふーん。いいからシャッター開けてよ。」

「へーい。」

ああ、現実には引き戻された・・・。

おれはしぶしぶシャッターを上げる。でーんと『よろずや』と書かれたシャッターを開けるのには
みゆきではちよつと背が足りない。

『「よろずや」ってなによ』ってつつこんでもらって大いに結構。

いくら骨董品店だからって限度があるよな！？うん。おれもそう思う。

「みゆき。ちよつと店先掃除しとけよ。」

「ええー？なんであたしー？やっというてよおー。」

「「じゃーんけーん！！」」

*

「落ち葉はちゃんと袋に入れとけよー。」

「やってるよー！！」

店先を掃除してるみゆきを見ながら茶をすすめるおれがいるのは
店の奥の生活スペース。

店の構造としては、1階は古い駄菓子屋さんみたいな感じで店のス
ペースから
住居スペースのテレビとコタツがのぞける。

でもって2階は完璧に住居スペースで、おれとみゆきが住んでいる。

この骨董品店はみゆきのじいさんが始めたもので、そこそこの歴史
があるらしい。

その証拠に柱はゆがんでいるし、ちゃんとすきま風も入ってくる。

ちなみに『よろずや』って命名もみゆきのじいさんだ。

そのじいさんてのがなかなかの変わり者だったらしく、変なものば
っかり仕入れていたらしい。

たとえば・・・、

店に入ってすぐ右の棚に置いてあるのは『梅干を入れておくと種がなくなる弁当箱』。

種を割って中身を食べるのが好きな人にはおすすめしない。

そのすぐ下の棚には『はめると半径3メートル以内にある乾電池の場所がわかる指輪』。

大きいサイズと小さいサイズがございます。はい。

あと、『3年座り続けると正座しても足が痺れなくなる石』とか。
ためした人はいないらしい。

その孫であるみゆきも変なものばかり仕入れてくる。本人は意識していないらしいが

まともなものは絶対に仕入れてこない。断言しよう、絶対だ！

ついこないだみゆきが仕入れてきたのは『ダイエットに成功するまで絶対に脱げない靴下』

560円ですが、交渉しだいで値引きもします。

大学卒業して、この店やり始めてまだ2週間。

大変なんだなあ・・・これが。

*

「シロー、おわった。」

「おつかれ。開店しますか。」

「うん」

準備中の札をひっくり返して開店中にしておく。

ちなみに、おれの名前はシローではなく、詩郎なんで以後よろしく。

その0 まあ、前置き（後書き）

これはブログなので、次回からお楽しみください。
ぜひ評価をお願いします。

その1 くもがくれ忍者（前書き）

その1 くもがくれ忍者

茶柱って、立つとうれしいよね。うん。

それに関してはまったく反対しないが、これはちょっと、どうかと思う。

店を開ける前に、仕入れた急須を使ってお茶を淹れたのだが、湯のみの中が見えなくなるぐらいびっしりと茶柱が立っている。

茶を飲もうとするたびに口の中もまわりも茶っ葉だらけでは、飲みずらくてしょうがない。

「あはははははははっ！！ひー！くるひー・・・あはははははっ！！」

みゆきは茶っ葉のひげを生やしたおれを見て大爆笑してるし・・・。

「おい、これいくらで仕入れてきたんだよ？」

「あははははははは！」

もう茶っ葉は拭いたのにまだ笑ってる。

「おーい、みゆきー？聞こえてるかー？」

「あはははははは！ひー、ひー、」

・・・完璧にツボにはまったらしい。

人の顔がそんなにおかしいか？失礼なヤツ。

みゆきが昨日仕入れてきたこの『必ず茶柱がたつ急須』、効果が抜群らしいことは実証できた。

まあ、茶柱のありがたみもくそもなくなる一品だけど。

あとはいくらで売るかだが、みゆきがこの調子では決められない。

「おおーいい。みゆきさん？生きてるー？」

「あははははははは。」

・・・もういいさ。諦めよう。

シャッターをがらがら上げて、今日も店を開けるとしようか。

*

みゆきがやつとのことでツボから抜け出してからしばらくたった午前11時。

「ねえ、シロー。昨日仕入れた忍者の人形、どこにあるか知らない？」

客がこないなので品物の整理をしていたみゆきが訊いてきた。

「忍者の人形？ああ、あの15センチくらいのやつ？」

まさに小学生が家庭科の授業で作りました、って感じの布製の忍者の人形。

「さっきの急須が入ってたダンボールにあるんじゃないのか？」

急須と一緒に仕入れたんだから。

「んー、ないんだけど・・・。」

まあ、うちの店ではよくある話だ。

「まあ、そのうち出てくんだろ。ほっとけて。」

あんなボロより店番のほうが大事だ。

「えええ？だってあれ3万円で仕入れたんだよ？もったいなくない？」

・・・え？さんまんえん？福沢諭吉3人分？

「・・・さがすぞ」

「え？なに？」

「今すぐに探すぞ！！諭吉×3の損失ははあまりにも多きすぎるっ！！！！」

当店の裏モットーは『激安買取高価販売』！！そんなことは許されんっ

店番なんかしてる場合か！

「あ、うん。そうだね。」

搜索開始！！

<あつというまに1時間>

「シローあつたー？」

「ない、ない、ないいつ」

もうすべての棚は見てまわったし、ダンボールや箱も全部ひっくり返した。

のに、なんで出てこないいい！？

「シロー、お昼ご飯食べようよー。」

「見つかるまで無し！」

「うええええ！？」

<さらに1時間>

「みゆき、あったか？」

「ないよもうー。」

「ちょっと、その壺をどかしてみるぞ。後ろに落ちてるかも。」

「わかった。」

大きなつぼなので、その後ろは死角になっている。

せーのっ……

「うぎゅい—————!!——!!——!!」

「な、なに、いまの?」

「あ!?!しまったっ!!」『ひたすら叫び続けるがま口』を押さえつけてたんだっ!——!!」

あまりにもうるさいので口が開かないように壺の下敷きにしていたのにつ。

「うぎゅい—————!!——!!——!!」

「戻せー!!——!!」

<もひとつおまけに20分後>

「この箱の中はさがしたー？」

「ん？どれ？」

つて、あのみゆきが開けようとしている宝石箱は！！

「あ、開けるなー！！」

「え？・・・ぶえっ！？」

・・・時すでに遅し。

みゆきは『小麦粉を撒き散らす宝石箱』を開けてしまった。

「・・・ほうきもってこい。」

真っ白な顔でみゆきはほうきを取りに行った・・・

<さらに10分>

「あと、探してないのは・・・ないか。」

・・・もう全部探したぞ？

このくそ狭い店内でこれ以上探す場所はない。

猫がくわえて持って行っちゃったとか？

だとしたら見つかりっこないな・・・。

「あーああ・・・。諭吉が水の泡か・・・。」

なんておれが落胆してると、2階からみゆきの声がした。

「シローー!! あったよー!!」

なにいつ!?

「本当か!?! 今行く!!」

だだだだだだだだだだ階段をかけあがる。

途中足の指をぶつけたが、3万円のためならなんのそのだあ!

「どこだ!?!」

「1111」。

みゆきはキッチンにいる。

「・・・キッチン?」

「ほら。」

みゆきが差し出したのは炊飯器。

・・・たしかにあった。米にまみれた忍者の人形が炊飯器の中に入っている。

「・・・なんで炊飯器の中に・・・？」

ていうかみゆき、めし食おうとしただろ！？」

「そんなことないよお。」

目が泳いでる目が泳いでる。

だいたいそれ以外に炊飯器を開ける理由があるか？

「この人形、お腹が減ってたんだね。だから炊飯器の中に。」

話そらすなよ・・・。

「これ、『餓死する忍者の人形』なんだよ。」

「・・・はい？」

「ご飯がないと餓死しちゃう珍しい忍者の人形なの。これ。」

「・・・人形が餓死するとどうなるんだ？」

ていうか、忍者なら我慢しろよ。

「どうなるんだろうね？腐るとか？」

それは、やだなあ・・・。

「さ、燃すか。」

ライターの用意はできている。

「え？」

しゅぼっ！

「だ、だめだよシロー、3万円が・・・！」

「うるせえ！さんざんな目に遭わされたあげくに『餓死する忍者の
人形』だあ！？

こんなもん燃やしてやるー！！！」

「やめてー！！！」

その1 くもがくれ忍者（後書き）

終わりです。

とっても評価が欲しいです。

その2 物好き美人

「世界一くさい缶詰が好きでたまらなーい」

「B級映画がなによりおもしろーい」

「太ったオタクしか愛せなーい」

『物好き』ってのはどの分野においてもいるわけで。

で、その物好き達のおかげでおれとみゆきは食っていけるわけで。

*

「この壺はなあに？」

長い黒髪をゆらゆらさせて、高そうなコートとバッグを持って、

お化粧もばっちり、ピアスがキラリと光る金持ちそうな美人。

こんなボロっちい骨董品店におよそ似つかわしくないお客様。

「『水が半分以上入ると割れてしまう壺』です。」

原型をとどめた形で残っている数少ないひとつなんですよ。」

ショートヘアといえなくもない、微妙な長さの茶色い髪をゆらゆらさせて、

『よろず屋』って印刷された安いエプロンにジーン姿で、

こんなボロっちい骨董品店がすっかり板についているみゆきが相手をする。

「まあ！なんて下らないのかしら！いいわ、買います。」

「ありがとうございます！」

そして、みゆきのことを言ってられないくらい『よろず屋』が板についているおれが
そんな2人をレジの横で眺めている。

で、おそらく、おれとみゆきは今、同じことを考えている。

（変な趣味の美人だなあ・・・）

そのお客はもう6品ぐらい「買うわ。」って言っている。

そしてその前には必ず「なんて下らないのかしら」とか「下らなさがいいわ」とかが付く。

おれたちからすれば非常にイイお客だし、実際にもう10万円分ぐらいいは買ってくれている。

ただ、その違和感ばりばりのそのお客に、なんとなく哀れみに近い

感情も抱いてしまう。

(・・・なんか辛いことでもあったのかなあ・・・)

*

結局その美人は12万とんで320円お買い上げになった。

特に、『ダイエットに成功しないと絶対に脱げない靴下』がお気に召したようで、

3足も買っていていきました。

・・・どれだけダイエットしたいんだ？

「なんだっただろうね、あの女の人」

「うーん・・・。みててなんとなく哀れみ感じさせるんだよね・・・」

「あ、やっぱりそう思った？」

お客様に向かつてなんて失礼な店員なんだ、おれ達・・・。

「ま、いっぱい買ってくれたからなんの文句もないけどな。」

「そうだね。感謝しないとね。」

うむ。感謝感謝。

<翌日>

「『書いた文字が踊りだすノート』ですが。」

「まあ、なんて無意味なの！？買っわー！」

「毎度ありー。」

<翌々日>

「『スイカしか切れない日本刀』なんですよ。」

「まあ、すっごく意味不明だわ！？買いますー！」

「ありがとうございますー」

<翌々々日>

「『一万円を入れると千円相当のダイヤが出てくる自販機』ですよ？」

「まあ、九千円はどこに行っちゃうのかしら！？買っわよー！」

「まいどー。」

「・・・なに考えてんだろな？」

「ね。もう全部で30万円は買ってると思うよ。」

「・・・金持ちだなあ・・・。」

「なにがいいんだろうね？仕入れたあたしが言うのもなんだけど。」

「下らなさ、じゃないの？」

「・・・物好きだね。」

「まっ takuna。」

おれとみゆきは店先で呆然としながら帰っていくベントツを見送った。自力では持って帰れないほど買ったので、とうとうベントツでよろず屋にやってきたのだ。

不釣合いこの上ない。いや、うれしいけどね？

*

今日もまた、そのお客は『勝手に増えていくティッシュ』を買ってベントツで帰っていった。

日も暮れ、そろそろ店を閉めようかという頃。

「なんか、商品が減ったな。」

「そうだねー。また仕入れに行かなきゃかなー……。」

「がんばれよ……ん？」

店の入り口になにか光るものが落ちている。

「……ピース、か。こんな商品あったっけ？」

「あ、それ、あのお客さんがしてたヤツだよ。」

「なんだ。じゃあ、次にきたとき返さなくっちゃな。」

「……ん？でもなんか、見覚えがあるような、このピース。」

「なあ、これ、どっかで見たことないか？」

「だから、あのお客さんが……。」

「そうじゃなくてさー。……まあ、いいか。店閉めるぞ。」

「うん。」

*

それからあのお客が来ることはもうなかった。

あとでわかったのだが、あのピアスは『つけると物好きになるピアス』だったのだ。

ただ、そんなピアスを持っていたのだから、あのお客は初めから物好きだったのでは？

当店では、ほとほどの物好きを歓迎します。

その2 物好き美人（後書き）

なんかしょうもないオチですみません（全部そうですけど）。

評価をくれるとうれしいです。

その3 さらばクロ&シロ

「これなんかどうじゃ？」

「まだあるのか……。ふー。それはなに？」

和服で白ひげを生やしたじーさんが来てもう1時間近く経つ。

自分んちにあつた骨董品を売りに来たのだが、……。ガラクタばつか。

「ふっふっふ、こいつはすごいぞい。」

そついいながらじーさんが風呂敷から出したのは……

「鉄ゲタ？」

「ただの鉄ゲタではないぞ『のろいの鉄ゲタ』じゃー!」

……『のろい』が平仮名の時点でもう大体の予想はつくが、いちおう訊いてみる。

「……のろいつてどんな？」

「これをはいた者は……。動きがのろくなるのじゃー!」

あーあ……。やっぱりか。

さつきからずうっとこんな調子だ。いいかげんしんどくなってくる。

こんな時に限ってみゆきは小学校の同窓会に行っちゃったし……。

「悪いけど、いらないわ。」

「うむーう。じゃ、これはどうじゃ!？」

出てきたのは某猫型ロボットが持つてゐるのにそっくりなポケット。

「なにこれ？」

「これは……なんと……」

『ビスケットを入れてポケットをたたくとビスケットがコナコナになるポケット』じゃ!！」

おお、今までで一番長い名前。

「……当たり前じゃないっすか？」

本人は盛り上がっているけど、こっちはさらにテンションが下がる。

「どうじゃ? 20000円で?」

「結構です。」

「しょうがないのう……。これで最後じゃ。」

最後だって。やったー……。

「『半径25メートル以内の人間を招きよせる招き猫』じゃあつ！
」

あー、そうですかー・・・って、そいつはすごい！！

「本物ですか！？」

「もちろんだとも！いままで偽物は一点も出してないぞえ？2体で4000円、どうじゃ？」

「買います買います！！」

こうしてよろず屋のレジ横には白黒2体の招き猫が置かれることになった。

*

「かわいいね。これ。・・・あれ？でもなんか変な形してるよ？」

そうなのだ。

白いほうは普通の格好をしているのだが、黒いほうは手がおかしい。本来あたまの横にあるはずの手を、肉球を見せ付けるように、前に突き出している。

なんだか客を押し返してしまいそうな手だな・・・。

「『半径25メートル以内の人間を招きよせる招き猫』らしいぞ。」

「へえ、すごいんだね。・・・でも、だれも来ないよ?」

たしかに店の前を人が素通りしていく。

「あ、そついや、あのじーさん説明書を置いていったな。読んでみるか。」

〔半径25メートル以内の人間を招きよせる招き猫の使い方と注意〕

・名前をつけ、毎日にぼしを2匹ずつ与えないと客を招き寄せない。

・2体が離れ離れになると効力がなくなる。

「そつか。じゃあまず名前をつければいいんだね?」

「そうだな。おれはにぼしを持ってくるから考えとけよ。」

「わかったー。なににしようかなー」

・・・

キッチンにあったにぼしを4匹持ってきたが、・・・どうやって食

へやせろよ？

とりあえず、招き猫の前に置いてみる。

•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

・
・
・
・
・
・
・
・
シュツ！

なにい！！？

こいつら、手でにぼしを掴んで口に持って行きやがった！！

猫なら口を使えよ！？

むしやむしや・・・。

2匹あつというまに完食・・・。

「すごいね！」

「……うむ。すごいっちゃすごいけどなあ……。」

「あ、名前、決めたよ。」

ミケか？タマか？はたまたマイケルか？

「こっちの白いほうが『シロ』、黒いほうが『クロ』!!」

「・・・え？」

そのまんまにも程があるだろ！！？

しかも『シロ』も『クロ』も普通、犬の名前じゃないのか？

「シロー、クロー、お客さんを呼んでねー！」

あ、決定らしい。ま、いいけどさ？

・・・キラーン！！

2体の招き猫もとい、シロとクロの目が光った！

そしてシロの手首が上下に動き出す。手招きをしているようだ！

「かもーん」

招き猫がしゃべった！？

「かもーんかもーんかもーん・・・」

「すごいー！！」

いや、すごいけど、なんつうか、不気味。

それにクロはなんにもしてないし。

・・・

ん、店の外を若い女の人を通る。

こっちをのぞいてるけど客か？

来るか？来るのか？

「ごめんくださーい」

来たー！！本当に入ってきたよ！！

本物だ、この招き猫！すごいじゃないか！

「いらっしやいま・・・」

おれとみゆきがにこやかにお客を迎えようとした、そのとき！

「シャーッ！！！！！」

クロが突然叫んだ！

「な、どうした、クロ！？」

これはどう見てもこのお客さんを威嚇している！

「フーーーー！！！」

招き猫のくせに毛が逆立ってる。

「あ、あの？」

お客さんも動揺している。そりゃ招き猫に威嚇されたらだれだって動揺するに決まってる。

「キシャー……ッ!!」

「ああ!クロ、やめてー!ー!!」

みゆきが止めに入ったが、時すでに遅し。

バリバリバリ……。

クロはいきなりお客さんに飛び掛って、顔面を引っかいた。

「ひ、ひiiiiii!!」

「あ、お客さん!?!」

当然逃げていくお客さん。そりゃ招き猫に引っかかれたらだれだって逃げるに決まってる。

「く、クローオッ!!!!」

*

その後、危険物として招き猫共は警察に連行されていった。

おれ達は平和なよろず屋で茶をすすっている。

「・・・たく、なんだったんだ、あいつらは？」

「お客さんが入ってきたときはすごいって思ってたんだけどね。」

「まさか顔面引つかくとはなあ・・・。」

「ごめんください。」

なんだ？閉店中だったのに・・・って、

「ああ！あんたこの間の！！」

店に入ってきたのは和服でひげを生やしたじーさんだった。

「この間の招き猫じゃがの、言い忘れてたことがあったんじゃ。」

「言い忘れてたこと、ですか？」

「左様。あれにはな、片方が獲物を強制的に呼び寄せ、

もう片方が襲い掛かるという、殺戮コンボが出来るんじゃ！！」

コンボ！？なんじゃそりゃ！？

「な、な、『半径25メートル以内の人間を招きよせる招き猫』じゃなかったのか！？」

「片方はそうじゃよ？で、もう片方は『客を拒絶する招き猫』じゃ。」

「

もはや招き猫じゃねえし……。

だからクロは手を前に突き出して拒絶のポーズをとってたのか。

「2匹合わせて『半径25メートル以内の人間を招きよせて引つかく招き猫ペア』!!」

「……みゆき、『二度と口が開かなくなるチューインガム』もつてこい。」

「うん。わかった。」

「?……なにをするんじゃ?そんなもんで?」

「てめえが2度と減らず口をきかなくなるようにするんだよお!!
!このやるお!!」

「な、なんじゃとお!!!?」

「営業停止になったうらみ!!」

「もががががつ!!!?」

*

そのじーさんは2度とよろず屋に来ることはなかった。

お客も当分よろず屋に来ることはなかった。

その3 さらばクロ&シロ（後書き）

ちゃんちゃん ♪ って感じですよ。

その4 三種のじんぎ1

「じゃーん!」

みゆきが仕入れから帰ってきた。

仕入れといっても、お得意さんの家をまわるだけだからそう大変なものではない。

「なんかよさそうなのはあったか?」

「まあまあかな?」

開店までまだ1時間ちよつと。

お披露目を始めるとしよう。

今日、みゆきが仕入れてきたのは黒いランドセルとビデオカメラ（かなり旧式の）とマスクの3つ。

「このランドセルは?」

「西車さん家の蔵にあったのを3000円で買ってきました。

『好き嫌いの激しいランドセル』です。

好き嫌いが多くて、嫌いなものは吐き出すカバンなんだよ。」

なるほど。

3000円はちょっと高い気もするけどなあ。

当店のモットーは『激安買取高価販売』なのに。

「じゃあ、ランドセルから見よう。」

うちはこれでも商品が本物かどうかちゃんとチェックしてる。

もちろん、やばそうなのは見てみぬフリと・・・。

「これ、おもちゃは好きで、本は大っ嫌いなんだって。」

ランドセルとしてそれは致命的な気が・・・

「ならこの辞書と人形でいいかな。」

「たぶん。」

人形を入れてみる。

「・・・・・・・・。」

反応なし。好きってことなのか？

辞書を入れるために人形を取り出そうとしたその時、

『だめええええ！！これ僕のだあああ！』

「うわっ」

ランドセルが叫んだ！男の子の声で！

「あ、喋るんだ。すごい。」

人形は好きだからとられたくないんだね。」

そしてみゆきは平然とコメント。普通驚かないか？違うのか？

「おい、ランドセル。その人形はおれのだぞ？返してくれよ。な？」

ランドセルを説得してみる。

『いやだ。』

きつぱり。

「人のものを返さないのは良いことなのか？」

『・・・これは僕んだ。僕が最初に見つけたんだ。』

まさに子供だね。やつかいだな・・・。

まいったなー。あの人形、結構高かったのに・・・。

「ちがうだろ？おれがお前の中に入れたんだから、おれのだろ？」

『・・・お兄さんの人形になる前は僕のだったんだ。』

断じてそんなことはない。

「嘘つくなよ。うそつきは泥棒のハジマリって言うだろ？」

『・・・嘘じゃないもん。』

これも嘘だ。

「というか、おれの物を返さない時点でおまえは泥棒なんだぞ？

おまわりさんの所につれて行っちゃうぞ？」

まあ、ランドセルなんか持ってっても困るだろうけど。

『・・・拘置所のご飯は美味しくないらしいから嫌です。』

どこで聞いたわけ？

「じゃあ、返さないとな？」

『・・・・・・・・。』

ああ、黙り込んだじゃったよ・・・。

ここは女のみゆきのほうが説得しやすいかもしれない。

「・・・・・・・・みゆき、パス。」

「おっけい！」

みゆきがランドセルに話しかける。

・・・異様な光景だな。

「ねえ、ボク。その人形がないとお姉さんとっても困っちゃうの。」

『・・・・・・・・。』

「ね？いい子だから返して？」

『・・・・・・・・うん。』

よし、さすがみゆきだ！

『そのかわり、お姉さんの・・・・・・・・胸をさわってもいいですか？』
なにいつ！！？

「ええ！？それは・・・・・・・・ちょっと・・・・・・・・。」

『じゃあ、人形は返さないもん。』

「おいこら、変態ランドセル！なに言ってんだコノヤロー！？」
ランドセルの胸ぐら（？）をつかんで人形を引っ張り出す。

『 ああつ！！ 』

「てめえなんかこれでも食ってる!!」

そして代わりに辞書をつっこむ。

「うええええっ!!」

すかさずランドセルのふたを閉める。

⌋
•
•
•
!
•
•
!
!
•
•
•
)
!
⌋

なんかがたがた言うてるけど、ほっとくか。

「ちょっとかわいそうじゃない？」

「そんなことはない！好き嫌いを直すためには、それを無理矢理でも食べさせなければ！」

「これもランドセルのためなんだよ。」

「そうかなあ……？」

みゆきはぴくぴくしてゐるランドセルを見つめている。

「大体、ランドセルと辞書なんて切っても切れない関係だろ？」

「それもそうだね。」

なぜか今ので納得したみゆき。

完全に動かなくなったランドセルに値札を貼る。

『好き嫌いが激しいうえに変態のランドセル（辞書つき）』 10
000円

あと2つ、ビデオカメラとマスクが残っている。

その5 三種のじんぎ2

「次はこのビデオカメラか。」

ランドセルを棚に並べて、残るはビデオカメラとマスク。

「これは『お笑いを強制するビデオカメラ』。東野さんから1000円で。」

「また、古い型だな。」

大きさはティッシュ箱2個分ぐらい。

結構重い。

「お笑いを強制って、具体的にはどんな？」

「スイッチをいれて30分以内に3つのネタを見せないと爆発するんだって。」

「なんじゃそりゃ……。」

「さらに、そのネタをみてビデオカメラが笑わなかったら、やっぱり爆発。」

「このビデオカメラ、笑うのか？」

売れないお笑い芸人さんの武者修行にどうぞって感じ。

「まあ、これは実証しないほうがいいな。」

おれにはお笑いのセンスはないし。

確実に爆発するし。

「そうだね。じゃあ、棚に置いておくよ?」

「おう。」

みゆきがビデオカメラを持って立ち上がろうとしたとき、

「あっ」

バランスを崩したみゆきがビデオカメラを放す!というか落とす!

「うわっと」

おれがキャッチ。落とさずにすんだ。

「ふー、あぶなかった。」

気をつけろよ。落としてスイッチが入っちゃったら爆発するんだろ?
」

「あははは、ごめんごめん・・・」

『ただいまより30分以内にネタを3つ披露しなさい。』

どこからともなく聞こえてくる声。

「・・・え？みゆき、なんか言ったか？」

「なんにも？」

・・・とすると？恐る恐るビデオカメラを見てみる。

『ただいまより30分以内にネタを3つ披露しなさい。』

やっぱりビデオカメラから声がする。

そして、おれの人差し指が赤い物を押してる・・・。

「ああっ！？キャッチしたときスイッチを押しちゃったみたいだーっ！！」

こんなベタな展開、許されるのかっ！？

「ええーっ！？」

『ただいまより30分以内にネタを3つ披露しなさい。』

*

「ど、どうする？みゆき、なんかネタないか？」

「あるわけないよ！シローこそなにか・・・。」

「あつたら訊いてない・・・。」

「あはは、そうだね!」

5分考えてもネタは出てこない。

そりやおれたちはお笑いなんかやったことないし、無理だつて!

「爆発つてどのくらいの規模なんだ?」

それによつては逃げるだけですむ。

「さあ?たしか、スイッチを押した本人は確実に巻き込めるようになってるとか。」

「そ、そんな・・・。」

「あ、てことはあたしは関係ないんだね。押したのシローだし・・・」

「そ、そんな・・・。」

そりゃひどすぎるだろ!?

だいたいビデオカメラを落としたのはみゆきだつてのに。

『あと20分です。』

ちゃんと予告してくれるビデオカメラさん。

「まずいな。」

。ネタをやる時間も考えて、あと10分以内に考えつかなければ・・・

『あ、そちらの女性もやってもらいますからね?』

「ええー!? あたしもなの〜!?!」

『はい。』

ちゃんと教えてくれるビデオカメラさん。よしよし。

「さ、考えるぞ。」

「うえええええ・・・。」

*

「あ、こないだテレビでやってたネタを思い出したよ!」

「ほんとか!? よくやった!

で、どんなんだ?」

「えっと、たしか・・・」

『パクリは禁止です。判明し次第、爆発します。』

「うえええええ……。」

『あと15分です。』

*

『あと10分です。』

よし！3つできたぞ！

「みゆき、この3つで勝負だ！！」

「で、でも、もしビデオカメラが笑わなかったら……。」

「やらなくても爆発するんだ！！」

「そ、そうだよ。はらをくくらなきゃね？」

「おい、ビデオカメラ、今からやってやるから、しかと見る！！」

『わかりました。』

*

「……どおもー！！」

拍手しながら登場。

「こんにちは、よろず屋ーズです!」

「今日は、ビデオカメラを3つのネタで笑わせたいと思います!」

「「いえーい!」」

ぱちぱちぱち……。

なんだかんだでのりのりのおれ達。

ビデオカメラに向かって、はたから見るとアブナイ連中に見えるんだろうな……。。

*

「シローさん、」

「なんですか、みゆきさん!」

「えい!」

おれの顔を殴りつけるみゆきさん。

「ぐっ!?!」

よろめくおれ。

「・・・殴ったね！？ママにしか殴られたことないのに！！」
ボケるおれに、

「怖いママだなー！」

つつこむみゆきさん。

『・・・・・・・・。。』

そして無言のビデオカメラさん。

*

「シローさん！死なないで！」

倒れているおれをゆさぶるみゆきさん。

「みゆきさん・・・。おれは、もう・・・ダメみたいだ・・・。」

「そんな！シローさん！！」

「店のことは・・・まかせ・・・」

「はつくしゅん！！！」

おれのセリフをくしゃみでさえぎるみゆきさん。

「最後まで・・・言わせて・・・欲しかった。」
力尽きるおれ。

「シローさん！」

『・・・・・・・・』

そして無言のビデオカメラさん。

*

「みゆきはん。みゆきはん。」

「なんやねん。シローはん。」

なぜか関西弁のおれとみゆきはん。

「となりの家に囲いができたらしいで？」

「そら、かつこええな！」

「関西弁だと意味ないやないかー！」

つつこむおれ。

＊

「ありがとうございますー！」

「どうでしたか？ビデオカメラさん！？」

3つのネタをやりきってあとはビデオカメラが笑つかどうかを見る。

『・・・・・・・・。』

黙っているビデオカメラ。

ま、まずい、爆発か！？

『・・・・・・・・へっ。』

見下したように笑うビデオカメラさん。

「こ、このやろお！！！！人が必死でやってんのを鼻で笑いやがったな！！！！？」

たかがビデオカメラの分際でえっ！！！！！！」

ビデオカメラにつかみかかるおれ。

「や、やめなよシロー！！とりあえず笑ったんだからさ、爆発しないんだって！！」

みゆきがなんか言ってるけど聞こえない。

「このやろーっ！……おれたちの苦しみが分かるのかっ！……！」

ピッ

「……あ、またスイッチ押しちゃってるよ！？シロー……！」

『ただいまより30分以内にネタを3つ披露しなさい。』

「ふざけんなーっ！……！」

その6 三種のじんぎ3

『お笑いを強制するビデオカメラ』を再び止めることに成功した頃には

すでに開店時間を過ぎていた。

「あーあ、時間過ぎちゃったね。」

「・・・・・・・・。」

「シャッター開けてよ。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・まだ機嫌直らないの？シロー？」

「・・・・・・・・うるさい。」

おれは今、不快の絶頂にいる。「腐快」と変換してもよし。

ビデオカメラを陳列棚に置きながら喋るみゆきに

返事もしたくないぐらい、深い不快・・・なんちゃって。

ああ、ほら、くだらないギャグが口をついて出てくるっ！

「いいじゃない。所詮あれはビデオカメラなんだから。」

そうだな。・・・でもな。

「その所詮ビデオカメラがおれ達を鼻で笑ったんだぞ！？
でもってその次は苦笑いだぞ！？腹立たないのかよ！？」

そう、あのカメラ、苦笑いまで浮かべやがったのだ。

あやうくまた逆上してスイッチを押すところだったのだ。

「うーん。べつに立たないよ？」

みゆきは平然としてる。

「・・・・・・なんでだよ。」

「だって、ネタを考えたのは全部シローだもん。」

絶世の笑顔でおれの胸をぞぶりとえぐるみゆきさん。

「・・・・・・シャッター、ぐらい、自分で、開ける。」

「うええええ？」

「・・・・・・。」

だんまり。

「・・・もう、わかりました。開ければいいんでしょ？」

みゆきはしぶしぶとてとてと踏み台を持ってシャッターを開けに行く。

「・・・・・・・・・・。」

*

まあ、シャッターが開いたからといって、開店しているかといって、客がすぐ来るわけでもなく、暇なわけだ。

「最後はこのマスクだね。」

なにやらバナナの絵がでんと描かれた悪趣味なガーゼマスク。

「・・・・やるわけ？」

なんか、嫌な予感がするわけだけど。

「やるよ。暇だもん。」

「そーだけどさぁ・・・・。2度あることは3度あるって言うじゃない？」

「3度目の正直とも言っつよ？」

・・・ああ、なんてオールマイティでいい加減なことわざ。

「大丈夫だよ。これはそんな大変なマスクじゃないよ?」

「どんな?」

「『俳句でしか喋れなくなるマスク』だって。」

「俳句?」

「5・7・5じゃないと声が出せないの。」

結構大変なマスクな気がする。

「あー、だからバナナの絵が・・・。」

バナナ↓芭蕉↓松尾芭蕉↓俳句

あのビデオカメラのせいか、くだらないことには冴えてるぞ、おれ。

「つけてみてよ?」

なんと?おれにそのマスクをつけると?

「何でおれが?みゆきがつけるよ。」

「えー、だってー。2度あることは3度あるって言うでしょ?」

うん。おれのセリフだった。

「3度目の正直とも言っただろ?」

「うん。あたしのセリフだった。」

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。」

2人の目が光る！きらーん。

「「じゃーんけーんっ・・・・・・・・」」

*

「ふ、ふん。俳句しか発音できないだけで、害はないもん。」

みゆきがぶつぶつ言いながらマスクをつけようとする。

「おう。がんばれよ。」

そしてみゆきの口にバナナが装着される。

「喋れるか？」

「・・・・・・・・。。。」

みゆきは口を動かしてはいるが、何も聞こえてはこない。

「すごいな。なんにも聞こえないぞ。」

「・・・・・・・・。」

みゆきが両手を突き出す。

ジェスチャーか？

「ちょっと待てと言いたい？」

うんうんとうなずくみゆき。

俳句を考えているのだろう。

「古池や 蛙飛び込む 水の音。」

みゆきが喋った！

「おお、たしかに俳句は聞こえてくるな。」

「うれしいよ 声が出たから うれしいよ」

続けてもう一句。

・・・みゆき本人の俳句の才能は0っぽい。

低レベルにもほどがあるぜ。

「よし、本物みたいだな。みゆき、もうマスクはずしていいぞ。」

こくこくとうなずくみゆき。

「しかし、本当に害はなかったな・・・って、みゆき？」

なにやらみゆきが苦しんでいる。

「・・・!!・・・!!」

なにか言いたげだけど、さっぱり分らない。

「・・・取れないのか？マスク。」

ぶんぶんとうなずくみゆき。

「そりゃ大変だな。なんで？」

くいつと首をかしげるみゆき。

「・・・そういえば ダメな俳句は 怒らせる」

みゆきが5・7・5で発言した。

「怒らせるって何を？」

数秒考えて、

「このマスク とれなくなるって 言ってたよ」

みゆきもすこし慣れてきた。

「なんでそんな大事なことを忘れるんだよ・・・。

そうかー。いやつけなくてよかった。」

いや、ほんと。

みゆきはジャンケンでは必ずグーかパーしか出さないから助かる。

「・・・・・・・・！」

あ、みゆきが涙目になりながらこっちを見てる・・・。

「わるいわるい。冗談だつて！あはははは！」

で、ダメな俳句つて？」

「わからない レベルが低い かも知れない」

確かにそれならみゆきのはだめだめだ。

「どうやってはずすんだ？」

「・・・・・・・・・・。」

口は動いてるけど何も聞こえない。

俳句にするのを失敗したのか？

「ダメなのと 同じ数だけ 良い俳句」

「つまり、レベルが低い俳句を言ったぶんだけ

レベルの高い俳句を言わなきゃいけないってことか。」

ふんふんとうなずくみゆき。

「・・・ん？なんだ、これ。」

よく見るとマスクに描かれたバナナに数字の4と書いてある。

「なんのこと？ マスクになにか ついてるの？」

「あ。」

バナナの数字が1増えて5になった。

「もしかしたら、この5って数字がレベルの低い俳句の数かも」

「本当に？ 数字はいくつに なってるの？」

「やっぱりそうだ。今の俳句でまた1増えたから6だ。」

つまり、あと6句詠まなければいけないのか。高レベルな句を。

*

「みゆき、とりあえず俳句は季語を入れないとダメなんだ。

なにか発言したいときは、せめて季語を入れる。」

みゆきはしばらく悩んで、

「わかったよ 季語を入れるね 夏の空」

・・・数字が7に増える。

「・・・もういい。喋るな。」

「・・・・・・・・。」

「ちょっとまつてる。ちゃんとした俳句を探してくるから。」

こくこくとうなずくみゆき。

*

松尾芭蕉、西行法師、正岡子規などの俳句を拝借して、みゆきに詠ませた。

「ぷはあ・・・・・・・・。」

マスクの外れたみゆき。

「あー。あー。うわあ、言動の自由って大切なんだなあ・・・・・・・・。」

なんか違う気がする。

「よかったな外れて。」

「うん。やっぱり、2度あることは3度あるのほづが正しかったね。」

「そうだな。」

「・・・いやしかし、みゆきの俳句の才能のなさには驚いた。」

「・・・なに？」

「いやだから、みゆきの俳句の才能のなさには驚いたって。」

「・・・。」

あ、またみゆきが涙目でこっちを見てる。

「わるいわるい。冗談だって。」

「シローのばかあつ！」

だだつとみゆきが陳列棚のほうに走る。

そんなに傷つけてしまったのだろうか・・・？

「み、みゆき？」

声をかけてみると、返事の変わりに何かがとんできた。

ぽん。

それをおれは見事にキャッチ。

「なにすんだよ、危ないな・・・って、これは!？」

おれがキャッチしたのは、

・・・『お笑いを強制するビデオカメラ』のそれだった。

「しかも、またスイッチ押してるーっ!！」

またしてもスイッチはおれの手の上に。

『ただいまより30分以内にネタを3つ披露しなさい。』

「うわあつ。ほんとに2度あることは3度あるのかっ!？」

どさっ

おれがわめいているともうひとつ、なにかが飛んできた。

あの黒い箱状のものは!

「『好き嫌いの激しいランドセル』!？」

しかも口が開いてる!！」

『うわあああ！人形ボクんだあああつ』

もじもじ

おれがさらにわめいていると、いきなり後ろから口を押さえられた。

「・・・・・・・・！？」

みゆき！？と言おうとしたのに声が出ない。

ま、まさか・・・『俳句でしか喋れなくなるマスク』だ・・・。

「あはははは！人を馬鹿にしたらいけないんだよ？」

みゆきが冷たい笑顔でおれに告げる。

「もし、2度あることは3度あるんだったら、

ランドセルとマスクはあと一回ずつあるね！」

あはははは、とみゆきは店から去っていった。

「・・・・・・・・！！！」

謝る、謝るから、許してええええっ！！！！

その6 三種のじんぎ3（後書き）

なんだか3話目はぐだぐだになってしまいました。
以後、気をつけます・・・。

その7 ロード オブ コットー品

「ありがとうございますー。」

満面の笑みでお客様をお見送りする。

ちなみに、作り笑顔などでは断じてない。

だって、4万円も買ってくれたんだもんっ！！そりゃあ、自然と笑みがこぼれもするさ！

ふっふん♪

「なんか最近調子いいね。」

となりには同じくニコニコ顔のみゆき。

「おうっ。なんか、運がむいてきたのかもな！」

そうなのだ。

当店よろずやは今、業界ナンバーワン（当社比）といっても過言じゃあないほど調子がいい。

今日はこれで8万円の売り上げ。

ここ1週間、連日10万円近くまで売っている。

こんなに業績がいいのは、創業以来初めてのことだと思う。

「みゆき、なんか売り上げが上がるようなもん仕入れてきたのか？」

腕を組んで考え込むみゆき。

「うーん・・・と、なんだろう？」

あ、もしかしたら・・・。」

「なんだ、なんか心当たりでも・・・。」

「ごめんください。」

おれのセリフを遮るようにお客様ご来てーん。

「いらっしやいませー！」「」

あああつ！忙しいって素晴らしいっ！！

*

「ふいー・・・。」

閉店後、遅めの夕食をとるおれ達。

コタツの上にはいつもより豪華な食事たち。

「そういや、さっきなんか心当たりがありそうだったな。」

割とランクの高い牛肉をほおばりながらみゆきに訊いてみる。

「うん。この間ね、水晶玉を仕入れたの。これくらい。」

箸を片手に大きさを表現しているのを見ると、ソフトボールぐらいか。

「水晶玉？」

「そう。路地裏ですれ違ったおばあさんがいきなり話しかけてきてね、

百円で売ってくれたの。」

「・・・おばあさん？」

「そう。紫っぽいローブを着て三角のぼうしをかぶったおばあさん。」

「・・・そうか。」

なんだそのいかにも怪しいばあさんは。魔法使いか。

「どんな水晶玉なんだよそれ？『業績が上がる水晶玉』とか？」

「それが、わかんないの。なんにも話してくれないまま歩いて行っちゃったから。」

「・・・うわあ。」

「?どうしたの、シロー?」

いや、あまりにも怪しい展開に寒気がしたのさ。

味噌汁を飲んで体を温めよう。ずず・・・。

「ほかに心当たりがないから、多分あの水晶玉が原因じゃないかと思うよ?」

「そっか。うーん。」

「なにか不満?」

「え?いや、その・・・。

後で痛い目に遭いそうなパターンだなあって。」

「そっかなあ?」

みゆきは朗らかに笑ってらっしゃる。

まあ、悩んでもしかたないか。

「よし、じゃんじゃん儲けてやるか!!」

「おー!」

2人でおかずを全部かつこんだ。

*

「こんなもんでいいかな？」

「うん。いい感じだね！」

今日はよろず屋新装開店の日。

あれから、あれよあれよと儲けが増えて、ついによろず屋を新装開
店することになったのだ！

「詩郎さん、みゆきさん、おはようございます！」

そして、従業員はおれたち含め5人。

「おはよう！がんばろうね！」

「はいっ」

*

「ついにこの日が来たな。」

「うん！びっくりだよ本当に。」

今日はよろず屋2号店開店の日。

「詩郎さん、みゆきさん、おれ、がんばります!!」

そして、従業員は1、2号店あわせて12人。

「おう、がんばれよ、2号店店長!」

「はいっ!」

*

そして、よろず屋は全国チェーンの骨董品店に成長した!!

今日も社長室に雑誌の取材が来ている。

「詩郎社長、成功の秘訣は何ですか?」

「そうですねえ。やっぱり、運ですかね。」

「なるほど、具体的にはどんな運でしょうか?」

「偶然運命の人に逢えるような運です。」

「ありがとうございます。いい記事になりますよ!」

「はっはっは!」

記者が帰るのを見送っていたみゆきが戻ってきた。

みゆきは応接セットのソファに座る。

「シロー、なんだかすごいことになってきたね！」

「おう！」

じりりりりっ

突然電話が鳴る。

がちゃ。

「なんだ？」

『あ、社長、32号店のことですが、ようやくいい土地が見つかりましたよ！』

「そうか！よくやった！いい店長を派遣しとけよ？」

『はい、分かってます！』

がちゃ。

「いや、成功しすぎて恐いぐらいだな！」

「そつだねー。それもこれも・・・。」

2人で社長室の棚に大事に飾ってあるものを見る。

「あの水晶玉のおかげ!!」

*

いまや日本のトップ企業にのぼりつめた株式会社よろず屋。

今日も社長室の電話が鳴り響く。

がちや。

「はい、四郎です。」

え、あ!はいつ。・・・ええ、はい。

・・・明日ですね?

お待ちしております!」

がちや。

「だれから?」

「みゆき、明日、内閣総理大臣がくるぞ!」

「うえええっ!?ホントに!?!」

＊

「これはこれは、ようこそお越しくださいました、総理！」

「どうも、はじめまして。四郎社長、みゆきさん。」

「はじめましてっ」

おれもみゆきもかなり緊張。

3人は応接セットのソファーでお茶を囲む。

「いやあ、いまやトップ企業ですな。よろず屋さん。」

「そ、そんなことは。はは、運が良かっただけですよ！」

「そうですそうです！」

「はっはっは、ご謙遜を・・・。」

おや、あれは？」

総理は棚にある水晶玉を指差した。

みゆきが棚から出してきて総理に手渡す。

「うちのお守りみたいなものなんですよ？」

総理は玉を鑑賞している。

「ははあ、これは綺麗ですな。」

さぞかし高価な・・・。」

「あはははは！」

百円でーす！

総理、実は物を見る目がないとか？

「あっ」

そのとき、つるつという擬音がぴったりなほどつるつと総理の手から水晶玉が落ちた。

カーン、ごろごろ・・・。

床にいい音をして落ちた水晶玉を総理は慌てて拾う。

「いやあ、失敬失敬！」

本当にびっくりした。

あれのおかげで（多分）成功したのだ。

いわば我が社のシンボル！

ピシッ！

「・・・え？」

今なにか、不吉な音が・・・。

ぱか。

総理の手にあつた水晶玉が、2つに・・・

「割れたあああつ！？」

*

「はっ！」

目が覚めると、そこはおんぼろなよろず屋の中。

おれはコタツの中で寝てしまったらしい。

「・・・ふつ。夢オチか・・・。」

「うーん。」

みゆきも目を覚ます。

「オハヨウ、シロー。いい夢を見たよ。」

「おれもだ。」

ふと、コタツの上にあるものが乗っているのに気がついた。

それは、2つに割れたあの水晶玉。

その8 タカラモノ

すがすがしい朝。

空は晴天で、寒さも緩んでいる。

めずらしくすっきりと目覚めたおれはちっと上機嫌。

目覚めのコーヒーなどすすりつつ、朝食のトーストをいただく。

実に優雅で平和な1日の始まり。

でも

「なんつーか、こーゆーのはちょっと違和感あるよなー。」

よろず屋にはもつと殺伐とした雰囲気似合うよなあ。

こんなボロっちい店に優雅さは不釣り合いって言うか・・・。

なーんて考えてたら仕入れに行っていたみゆきが帰ってきた。

「シロー、たっだいまー！すっごいのを仕入れてきたよー！」

「おお、みゆき！よくぞドタバタ方面の空気に戻してくれた！」

「え？なにが？」

おれの意味不明な発言に首をかしげるみゆき。

いや、こつちの話。

「で、すつごいのつてなんだ？」

いつぞやの『ねずみ算式に増えていく納豆』よりすごいのか？」

うん。あれはひどかった。

「うん。もつとすごい！」

なにいつ！？あの、店を埋め尽くしてもなお増殖し続けた納豆よりもか！？」

ど、どんな大惨事が起こるんだ！？」

「じゃーん、これです。」

「うわあああー！」

つて驚いてみたけど、ぱつとみは・・・サイレン？

あの、覆面パトカーが乗っけてるような、赤くて丸いサイレンそっくりだ。

「・・・なにこれ。」

『爆発的な音量を出すサイレン』とか？」

「ふっふっふー。違います。」

『宝物の近くに来ると鳴り出す警報機』でっす!！」

宝物の近くに来ると鳴り出す?

それって警報機じゃないような気がするが・・・。

「そ、それじゃあ、もしかして・・・?」

「そう。すっごいお宝を簡単に探し出せるかもしれないんだよ!？」

すごいでしょ!！」

例えば埋蔵金やなんかも探し出せるかもってことか!

「そりゃすごいな!」

「でしょでしょ!？」

さっきの優雅な空気なんかどっかにうつちゃって、

宝探し開始!!

*

試しに効果を見てみようということで、店内を調べてみる。

「見方によつてはここは宝の山だからな。

なんか反応があるに違いない!」

とサイレンを片手に約5分。

レジを置いているカウンター（というかただの机）のそばに来たそのとき、

『ふあんふあんふあん!』

「おっ!」

サイレンが赤く光つて、刑事モノっぽい音がする!

「近くに宝物があるってことだね!？」

興奮するみゆき。

「探してみよう!」

サイレンのスイッチを切つて、カウンターの引き出しを片っ端から開けていく。

領収書、ボールペンに鉛筆、消しゴム、定規、e t c

いたって普通の文房具ばかり。

「……とくにこれってのはないな。

みゆき、なんかあったか？」

「ちょっと待って。」

みゆきはいつくばってカウンターの下を見ている。

「・・・あ！」

みゆきが声をあげる！

「な、なにがあった！？」

ひょこつと顔をあげるみゆきの手には、丸くて銀色で平べったい物。

「・・・五百円玉？」

「うん。ラッキーだね！」

・・・まさか、とは思うが、もしかして。

「みゆき、五百円玉を持ってここから離れてみ？」

「え？あ、うん。」

店の入り口に移動するみゆき。

サイレンのスイッチをオン。

プチ。

『・・・・・・・・・・』

反応なし。

「みゆき、こっちに來い。」

みゆきはとてとて近づいてくる。

『ふあんふあんふあん!』

とつても反応するサイレン。ってことは、

「五百円玉が宝かよっ!!?」

どんな基準で判断してんだコイツ。

「でも良かったじゃない。五百円玉が見つかった。」

「・・・・・・・・むっつっ。」

一応みゆきが慰めてくれるけど、それにしたってなあ・・・・・・・・。

*

場所を変更しておれ達が住んでる2階でサイレンを使ってみる。

「せめて1万円札ぐらい見つけてくれねーかなー。」

キッチンでは反応がなかったので2人の部屋に入る。

ちなみに、1人1人の部屋を確保できるようなスペースはこの家には存在しない。

すこしうろろしていたら反応があった。

『ふあんふあんふあん!』

「今度はなんだろうね?」

そこは本棚の目の前。

やっぱり、これといった宝物がある気はしない。

「価値のある古書でもあったっけか?」

「ないと思うけどなあ。」

確かに2人ともそんなに本好きではない。

しばらく探してみるけど、やっぱり見つからない。

ほんとにあんのかなー。

10分ぐらい探して、やる気も失せてくる。

「あ、ほら、なつかしー。」

みゆきは探すのをさぼってアルバムを見てるし。

それはみゆきが高校のときの卒業アルバム。

懐かしそうにみてるみゆきに宝を探す気は0っぽい。

「おい。まじめに探せー。」

「うーん。わかってるー。．．．あ、修学旅行の写真！」

わかってませんね．．．。

「．．．ん？」

いま、ふとひらめいた。

まさかとは思うが、もしかして。

「みゆき、そのアルバムを持ってここから離れてみ？」

「え？あ、うん。」

部屋の反対側に移動するみゆき。

サイレンのスイッチをオン。

プチ。

『．．．．．』

反応なし。

「みゆき、こっちに來い。」

みゆきはとことこ近づいてくる。

『ふぁんふぁんふぁん!』

・・・とっても反応するサイレン。

やっぱりアルバムに反応しているらしい。

ということは・・・、

「・・・思い出が宝物、か。」

欲に目がくらんで、おれは本当の宝物を見失っていたのか・・・。

うんうん。心が洗われるなあ。

「って、そんな『いい話』で片付けられてたまるかあっ!!!」

サイレンを床に叩きつける。

さっきも言ったが、よろず屋にはもっと殺伐とした雰囲気似合うのだ。

感動はいらんっ。

*

結論。

このサイレンは役に立ちません！

断言します！

「なんか、振り回されただけみたいだね。このサイレンに。」

あきらめて茶をすすめるおれとみゆき。

「まったく。なにが『宝物の近くに來ると鳴り出す警報機』だ。」

「最初はすごいなって思ったのに……。」

「結局、動き損だったってワケだ。」

ずずずと茶をすすめる。

「……でも、楽しかったじゃない！」

満面の笑みで見つめてくるみゆき。

「みゆき……。」

うん。大変だったけど、またいい思い出が1つ増えたんだ。

まあ、確かにそれで十分かな……。

『ふあんふあんふあん!』

サイレン、超反応。

「うるせえっ!」

その8 タカラモノ（後書き）

感動的なお話でした。

その9 根っこ

そんなわけで、朝の入荷品チェックのお時間です。

なにがそんなわけなのか、机の上に転がっているのは2つの骨董品。

片方は黄色くてなんともかわいらしいおしゃぶり。

もう片方は黒くてなんともまがましい箱。赤くて大きいボタンのおまけつき。

『口にくわえると幼児化するおしゃぶり』と、『すごい威力のバクダン』

「・・・なんかもう、この時点で先の展開が見えてこないか？」

なんかすっごい危機感を感じるんですけど、この2つ。

「え？なんで？」

案の定の反応。まあ、どーでもいいんですけどさ。

「さ、試しに使ってみようか。」

「バクダンのほうはかんべんな」

「さすがにこっちは試さないよー。」

「つか、ふつーに考えて、

バクダンなんかがこの店（骨董品店）にあることじたいがおかしい
だろ。

骨董品でもなんでもない、ただの危険物じゃなか。

うゝ、しかもなんか、このレトロな起爆スイッチを見ると……
押したくなる。

だめだ、こんな危険なもん、ここの置いてたらだめだ！

「爆発物処理班呼んでこーいっ！」

「あう！」

「な、みゆきもそう思うだろ？」

「あゝうゝ。」

「つーか、仕入れてきたのお前だろっ」

裏拳でツッコんでみる。

「あ？」

「だから、仕入れてきたのお前だろっ」

もっかいツッコんでみる。

「あゝあゝ。」

「・・・・・・・・。」

さすがに間がもたないっす。

お察しのとおり（？）、俺の隣に座っているみゆきの口にはおしゃぶり。

「なるほど、このおしゃぶりは本物みたいだな。」

みゆきは完璧に幼児化している、つか赤ん坊になってる。

きゅぽん！

みゆきの口からおしゃぶりを抜き取る。

「ほら、実験も終わったし、開店準備するぞ。」

と、みゆきを見るとなぜか泣き顔。

「お、おい、どうした？」

みゆきの肩に手を置こうとしたそのとき、

「ぎゃああああああんっ！！！！」

「なっ！？」

みゆきは、なんと号泣・・・。

「お、み、みゆき！？どうしたんだよ！？あ、おい！？」

「ぎゃああああああんっ！！！！」

両手を目にあてがって大泣きするみゆきはまさに赤ん坊。

「ま、まさか、おしゃぶりの効果が・・・」

継続しているらしい。

「お、とにかく近所迷惑だから泣き止んでくれ！」

「ぎゃああああああんっ！！！！」

赤ん坊ならともかく、体の大きなみゆきの泣き声はひとときわ響く。

ど、どうしたら泣き止むんだ！？

え、ええーと、・・・。

あ、そうだ。

「そりゃっ」

がぽっ。

おしゃぶりをみゆきの口につっこむ。

「ぎゃっ・・・。。」

ぴたりと泣き止む。

「……ふう。」

これでとりあえずは、良し。

みゆきはうれしそうにおしゃぶりをくわえている。

*

「べろべろばー！」

「きやつきやつ！」

手をたたいて喜んでくれるみゆき。

結局、おしゃぶりがないと大泣きするということが判明したので、くわえさせたままにしてある。

しかし、このままでは当然開店することもできない。

暇なので、赤子と化したみゆきをあやして遊んでいるわけである。

「……にしても、」

おしゃぶりをくわえた赤ちゃんみゆき。

……うーむ。なんと邪念をかきたてるシチュエーションだろうか・

・・。

野生に戻りたい誘惑を抑えつつ、どうしたもんかと考える。

もちろんみゆきに襲い掛かるかどうかをではない。

「このおしゃぶり、どれだけの間効力があるんだろうな？」

「あう？」

無邪気に首をかしげるみゆき。

もしこのまま元に戻らなかったらどうしょー。

なんて考えながら部屋をハイハイで練り歩くみゆきちゃん。

その行く手には・・・先刻のバクダンちゃん。

「どわっ！」

と、時すでに遅し。

みゆきちゃんはしっかりとバクダンちゃんを抱えている。

「あう？」

「み、みゆき、それを、返せ？」

「あー、あー。」

バクダンをいじりだすみゆきちゃん。

「な？みゆきちゃん？いい子だから、その箱を、おにいちゃんに、」
自然猫なで声にもなる。

「返し……。」

ぼち

「あ、」

ああ、やっぱり、あーゆーボタンを押したくなるのは、赤子にも共通の本能だったのね。

なんてことを、爆発の閃光に包まれながら思った。

*

ふと目を開けると、そこには空いっぱいのお星様。

「ね、シロー。あれオリオン座じゃない？」

みゆきは元に戻っているみたいだ。

「そうなのか？」

おれはいまいち星座とかには興味がない。まあ、オリオン座ぐらい

は聞いたことあるけど。

「うん、たぶん。」

ふーんと生返事を返す。

あれ？

「なあ、みゆき？」

「うん？なに？」

「なんでお星様なんて見えてるわけ？」

「？夜だからじゃない？」

いや、そうなんだけどさ。

・・・うーん。

ちゅちゅちゅちゅちゅちゅ・・・

ちーん！

がばつと飛び起きる。

隣にはみゆきが寝転んでいる。周りにはがれきの山。

「よ、よろず屋は？」

見たところ、木っ端微塵？

「えと、木っ端微塵になっちゃったみたいだね。」

なーるほど。屋根も吹っ飛んじゃってるからお星様が見えるのね。

「・・・・・・・・むう。」

「まあ、しょうがないよ！」

「スイッチ押したのお前！」

裏拳でツっこんでおく。

「え、そうなの？」

心底意外そうにこっちを見る。

どうも記憶にないらしい。

「ちなみに、仕入れてきたのお前だろっ」

もう一回ツっこんでおく。

「あ、それは覚えてる。」

あはははは、と笑うみゆき。

「でも、これじゃあしばらくはお店できないね。」

「ついでに生活もな。」

「うん。」

「まあ、ほら。今までも2人で何とかしてきたんだし、これからも何とかなるだろ！」

「あはは、そうだね。がんばっていかなきゃね。」

「おう。」

この、どんなときでも平常を保てるのと、立ち直りが速いのは職業病か。

はたまた能天気なパートナーのおかげか。

どちらにしても、悪いものではないと思う。

*

現在、よろず屋は再建の真っ最中。当然、おれたち借金まみれ……。

とりあえずはがれきの中から無事な商品をつ引っ張り出し、川のそば、橋の下で臨時よろず屋を開いてなんとかやっている。

公園での生活も慣れようと思えばなれるもので、

おれもみゆきもたくましく生きている。

「悩んだってしょうがないもんね。明るくやっていかなきゃ！」

「ああ、そうだな。」

どんな状況下だって、この店に笑顔が絶えることはないのだよ。

その9 根っこ(後書き)

終わりです。

更新できなくてすいませんでした。

読んでくれた方にはひたすら感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8082b/>

コッター品店よろず屋

2010年10月12日08時14分発行